

コロナ禍における公運審の動きと 見えてきた新しい公民館のあり方



昨年2年ぶりに復活した本多公民館まつり

日時・会場

10月1日(土)

午後1時30分～4時

国分寺市立本多公民館

国分寺市本多1-7-1

基調発表

令和3年6月提出の答申を含む
公運審の取組

国分寺市

リレー発表

現在、答申を作成している公運審の取組

狛江市・国立市・東大和市

シンポジウム

狛江市・国立市・東大和市・国分寺市

ファシリテーター：倉持伸江さん
(東京学芸大学准教授)

グループワーク・発表

参加者同士で取組を話し合い、
交流します。

コロナ禍が始まって2年が経過しました。その間、多くの公民館が閉館したり、活動の制限を受けてきました。そのような状況下でも学びを継続させるために各市の公民館運営審議会が試行錯誤してきました。「ウィズコロナ」社会における制限緩和の流れの中で見えてくる新しい公民館のあり方を探ります。

- 対象：都公連加盟市公運審委員
公民館・社会教育関連施設利用者など
- 定員：45人(各市4人程度)
※委員部会員除く
- 申込：在住市の公民館及び
社会教育関連施設窓口へ
- 問い合わせ
東京都公民館連絡協議会
委員部会事務局

国分寺市立もとまち公民館 久保
Tel 042-325-4221

E-mail
motomati-Kouminkan@city.kokubunji.tokyo.jp



メール

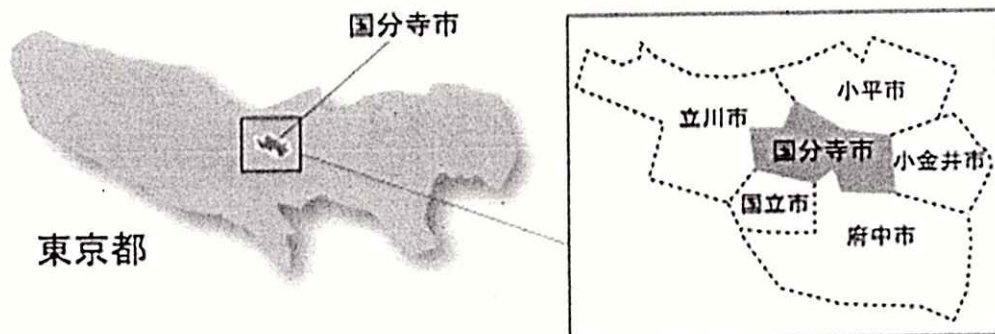
令和4年度 東京都公民館連絡協議会委員部会 第1回研修会
 「コロナ禍における公運審の動きと見えてきた新しい公民館のあり方」

基調発表

コロナ禍における公運審の取組みと これからの公民館のあり方

国分寺市公民館運営審議会 戸澤 司

国分寺市の紹介



- 市制施行：昭和39(1964)年11月3日
- 面積：11.48km²
- 人口：128,011人 <令和4(2022)年4月1日現在>
- 特徴：武蔵野の面影を残す住宅都市
 JR中央線・武蔵野線、西武線国分寺線・多摩湖線が
 交わる交通の便の良いまち
 水と緑の豊かな文化と歴史を有する都市
 日本宇宙開発および新幹線開発の地



国分寺市立公民館運営審議会の歩み

①平成27(2015)年 各館にあった公運審を統合
(各館にはサポート会議を設置)

②平成29(2017)年 第1期答申
「地域づくりを目指した公民館のあり方」

③令和元(2019)年 第2期答申
「国分寺のまちを学び共に創りだす
公民館活動の今後について」

【委員構成】

- 第1号 = 公募により選出された市民
- 第2号 = 公民館利用者
- 第3号 = 学校教育の関係者
- 第4号 = 社会教育の関係者
- 第5号 = 家庭教育の向上に資する
活動を行う者
- 第6号 = 社会福祉関係団体の代表者
- 第7号 = 学識経験のある者



第3期途中に襲いかかった新型コロナウイルス感染症

① 令和2(2020)年3月3日～6月4日

【資料1・2】

公民館完全休館

→公運審は4, 5, 7月の3回分が中止

② 8月から公運審再開

③ 10月27日 諮問

「新型コロナウイルス感染症対策下における公民館の役割について」

【第1・第2波】

志村けん・岡江久美子死去

東京オリンピック1年延期

東京の1日の新規感染者数はピークで500人弱

利用グループへのアンケート実施

公運審から

「歴史的出来事としてのコロナ禍における利用グループの活動をアンケートで記録に残すべきだ」という声



登録更新時にアンケートを配布し
202団体から回答

【資料3】

【第3波】

東京の1日の新規感染者数はピークで2500人弱

公民館は1月から夜間休館

アンケートの結果

- 1 休館期間も1割のグループはオンラインや他会場を使って活動継続
- 2 活動停止による生きがいの喪失
- 3 公民館開館継続への強い思い
- 4 ネット環境への温度差

令和3(2021)年6月

第3期答申

「新型コロナウイルス感染症
対策下における公民館の
役割について」

- 1 公民館まつり等の一定規模以上の集客事業の開催について
- 2 オンライン講座の展開について
- 3 オンライン化を進める際の社会教育施設としての公民館の役割



【第4・5波】

デルタ株流行

東京の1日の新規感染者数は
ピークで5000人弱

8月には東京オリンピック開催

1 公民館まつり等の一定規模以上の集客事業の開催について

- ・ グループ活動を維持するためにも公民館からの積極的な情報発信・メディア活用が必要
- ・ 「三密」の視点から
飲食を提供する模擬店は困難であっても、発表や展示は、リアルとバーチャルを併用してでも可能

2 オンライン講座の展開について

- ・ これまで公民館に足を踏み入れなかった人たちにも情報を共有することができ、公民館にアクセスする間口が広がる
- ・ 遠隔地にいる講師と参加者とがつながる
多元性・双方向性を活用することができる

3 オンライン化を進める際の 社会教育施設としての公民館の役割

- ・ コンテンツの充実
- ・ 職員の企画力の育成
- ・ フリーWi-Fi設置といった環境の整備
- ・ 発信力の強化

再開館し、答申を受けた後の公民館

- 1 答申直後の令和3(2021)年10月には5館中4館で
対面・ネットを使った「まつり」「発表会」の開催
- 2 各公民館に貸出用モバイルルータを配置
- 3 ライブイベントのYouTube配信
- 4 ホームページ改訂プロジェクト

公民館を取り巻く課題の再確認

現在の公運審の動き

令和3(2021)年7月から第4期公運審がスタート

第4期諮問

「ひととひとをつなぐ持続可能な公民館活動について」

- ① 幼児から若者の世代にとって身近に感じられる公民館
- ② 就労、子育て等の現役世代が気軽に集える公民館
- ③ すべての世代が公民館を舞台につながることのできる公民館

開会の言葉：田中委員部会長

令和4年度東京都公民館連絡協議会第1回研修会では「コロナ禍における公運審の動きと見えてきた新しい公民館のあり方」をタイトルとして、研修を行うことになった。まず研修の入口として、国分寺市の公運審委員が基調発表を行う。

国分寺でも、2020年(令和2年)の前半期、公民館が閉鎖され活動ができなくなった。その中で2020年10月から2021年6月まで諮問に対して他市に先駆けて検討を行い、答申をだした。この内容と、そこに見えてきたものについての基調発表となる。

コロナ禍の中、その後は、各市でも公民館運営審議会は、できる範囲で諮問等に対して公運審の活動を継続してきた。その成果を、狛江市・国立市・東大和市の3市にリレー発表をしてもらう。ファシリテーターとして倉持伸江先生を招き、シンポジウムを行い、休憩をはさみ、グループディスカッションをし、各グループの内容を共有し、今後の公民館の活動に活かしてもらいたいと考える。

司会：今日の流れの確認(同上)

各グループには、都公連委員部会の会員がファシリテーターとして入っている。

基調発表・国分寺市の事例→資料参照

各市の発表：狛江市・国立市・東大和市→資料参照

シンポジウム：倉持先生・国分寺市・狛江市・国立市・東大和市発表者等8名登壇

司会：東京学芸大学准教授・倉持伸江先生は東京都のご出身。専門は社会教育学・生涯学習論でさまざまな公民館活動に実践的に関わってくださっている。コロナ禍のこの3年間の公民館の様子も分かっている。コロナ禍における公民館、公運審の動き、そして、これからの公民館、公運審のあり方を30分という短い時間であるが、このシンポジウムで探っていけたらと思う。

倉持先生：これからシンポジウムに入るが、シンポジウムの後休憩をはさみ、各グループで委員、職員の皆さんでそれぞれの市や活動について意見交換をしていく。その後グループごとの発表に移るが、グループ内で発表のポイントを確認していきたい。

シンポジウム

国分寺市

倉持先生：国分寺市ではコロナに関わる問題で、早い段階で答申をした。だからこそそのコロナの最中の答申ということで、特に議論になった点、答申を踏まえて試行されて、やってみて、見えてきたものを聞きたい。

戸澤委員：公民館としての場所がいかに大切かを実感。休館して再開、アンケートをとり、グループ間、公運審で話し合い、場所がないと何もできないと実感した。公民館活動に参加するグループが弱体化し、参加する人数が減ってきたという現実にも直面した。

倉持先生：コロナの最中のディスカッションだったと思うが、どのように委員が課題や意見を出し合ったのか？議論の進め方は？

戸澤委員：フリーディスカッションが多く、第一期、第二期、第三期と委員長、副委員長が意見を吸い上げ、課題をまとめていった。

倉持先生：国分寺は各館独立方式であり、各館に地域性があるが、それぞれの委員の活動の声を集め、具体例を持ち寄り、情報共有されたのか？

戸澤委員：力を発揮したのが、各館の公運審の後継としてのサポート会議である。地域に密着した委員さんが来ているため、より地域に密着した話が出てくる。人と人が会っていることで生まれるちょっとした会話が次のヒントになっていった。

倉持先生：このプロセスは参考になる。オンラインについてはどのような議論があったか？

戸澤委員：「オンラインって公民館の講座に合うの？」という疑問から始まった。確かに通信手段、SNSは非常に便利だが、一方通行になってしまうのではないかと個人的には馴染まなかった。

倉持先生：公民館らしい事業とは…なんだろうと検討が行われていたので各市からの意見交換でお願いする。

狛江市

倉持先生：狛江市ではコロナ禍のなか新しい生活様式、新しい公民館のあり方、事業のあり方の検討が進められ、事業評価にも取り組んでいる。実際、コロナ禍の最中に事業評価のあり方シートの作成と、公運審での事業評価を行っている。公運審でどのように取り組んだのか、またどのようなやりとりがなされているのか？

職員高橋さん：事業評価シートの作成は担当の職員を中心に、あくまで公民館側の視点で作成。それを公運審委員に見てもらう。周知・環境等5つの評価項目に分けてある。一つひとつに対して、フリートークも含め、思ったことを直球で言ってもらった。例えば、アンケートの回答結果が「広報狛江」でしかなかったため、新聞を取っていない人は見られない。その人たちへの手立てはどのようにするのか、救えるのか、FacebookやTwitterを更に頻度を上げて掲載しなければ等の意見も出た。実験教室等は受付開始

と共に人気の講座で抽選のやり方を検討。また、チャレンジ学級(障がい者の方向けの学級)については、障がいの対象の範囲等について他市を参考にしてはどうか等、率直な意見が出てきた。

倉持先生：公民館がまず、シートで自己評価をして、公運審の会議の中で説明した上で資料を提供し、公運審でそれぞれの立場から意見や質問をし、それをまとめて更にシートに記入していくというプロセスを丁寧に踏んでいる。評価シートは負担のないようにと、継続できるということがキーワードだった。やってみての想いや実感についてはどうか？

斎藤委員長：評価シートは作成した当時の担当者との温度差があり、形骸化しているところもあった。さまざまな地域を調べたが事業評価をしているところは無いようだった。法律上でも事業評価は記載されており、公運審の仕事の一つでもある。職員も委員も入れ替わりがあっても、継続していけるものを作成するという熱い想いがあった。

倉持先生：職員は公運審に事業の説明や資料の提示をしなければならないが、委員が替わっても評価をするという役割を通して、職員と委員が事業を知り、学び合う関係性を感じた。コロナ禍の中での公運審の活動の一部として、評価の活動を通して改めて見えてきたもの、浮き出てきたものはあるか？

職員高橋さん：現在粕江市の公民館ではWi-Fi環境が整備されていない。今後、中央公民館の改修が令和6年以降予定されているので、この環境整備によってオンライン等の事業ができる見通し。他にも、実験教室の様子を動画でYouTubeに載せるなど試みているが、オンラインについてはまだ弱いのが現状である。

職員刈野さん：オンラインの講座については、市民の方と共同し、オンライン配信をようやく始めたところである。子ども実験教室は小学生から高校生、理科実験に特化し、おうちでできる理科実験の動画の作成を依頼しながら進めているところである。

国立市

倉持先生：国立市は答申提出直前の貴重な資料を提示していただきありがたい。はじめに、記録としての答申の意義が示され、目次を見ると緻密で丁寧であり、時系列に沿って、色々な立場の方からの意見が集約されている。答申をまとめていくにあたり、意識したこと、まとめるプロセスの中で共有していった問題意識について教えてもらいたい。

末光委員長：議論を進めていく中で色々な立場の対立するかもしれない意見も併記して載せていくことを目標としている。例えば、市民アンケートでは、公民館が夜10時まで開いており安心したが、職員の立場からすると夜間は一人体制であり、容易に解決はできないが、事実を載せていくことを意識していた。

倉持先生：公運審を大切にしよう、教育機関としての公民館であるということを、提言の中にも取り込むべきとあったがどのような議論がなされたか、提言としてまとめられていくポイントを聞きたい。

末光委員長：コロナ禍で、公式な会議が開催できない現状があった。だが、市民と職員とで、広報としての公民館だよりの意見を出し合う委員会が閉館中もオンラインで開催でき、メッセージも残したが、公運審は実施できていなかったのは何故だろうという課題が出た。公運審がもっと主体的に市民の

意見を行政に伝えるべきではなかったかということも踏まえそのあたりを意識して答申を作成してきた。

倉持先生：目次の中に、変化に対応できる公運審作りとキーワードがあるが、これは公運審としての反省点や公民館に対する要望等が意見をまとめていくプロセスの中で議論されたのか？

末光委員長：公運審が開催できなかった理由の一つとして、市の制限でインフルエンザ等の緊急時の状況下のため、公民館の事業が休止になっていた。感染拡大防止の観点から市の計画で縮小でなく、休止ということも影響していた。公運審としては教育機関としての公民館のあり方の見直しを要望すると共に、閉館時に公運審はどのような形で議論できるのか、オンラインで深まった議論ができるのかという点を更に考えていきたいという決意表明も含まれている。

倉持先生：公運審が公民館の運営、開館、事業について前向きに責任をもって関わっていきこうというスタンスも感じられ、答申の中に公運審のあり方を問い直す姿勢のあることが印象的である。

末光委員長：昔は実際、地域に入り、活動をしていたのではないかと、公民館の中での議論だけではなく、地域に入ることも大切であるという意見もあった。

倉持先生：この答申の目次をみると公運審としてのあり方や、ふりかえり、定義し直しなどが展開されており、また公民館が公共施設、集会施設としてだけではなく、教育機関であることからどのような対応ができたのか検証をされていることも含め、次につながる提言と感じた。

東大和市

倉持先生：東大和市では、職員の立場、公運審委員長の立場での2つの発表があった。諮問する側、答申する側のそれぞれの問題意識がわかった。2つの分科会でどのような議論がなされ、これからのまとめで、今どのような展開になっているのか、議論する事自体、苦勞されているとのことも含め補足をお願いしたい。

佐々木委員長：宿題を受け、2つの分科会に分けて議論を始めた。決まった回数定例会のため、5人体制の分科会はそれぞれ調整し、話し合ってきた。定例会では分科会の進捗状況を発表し、全体で意見をもらい、それをまた、分科会に持ち帰る等の繰り返しで10月にまとめを行う。公運審委員はそれぞれの団体の代表として、後ろにたくさんの方々の意見を背負ってその代表として参加している。それぞれの団体の想いを受けた代表でありながら、大きい諮問を受けたものを審議会として答申するのであるから、意見の一致、まとめていく必要がある。諮問・答申からできている公運審は、社会教育委員とは異なる立場である。会長として委員に意見を出してもらうためにも、会長はどちらの分科会にも属さなかった。短い時間で、宿題をこなそうという途中である。

倉持先生：会長はあえて分科会には入らず、繋ぎ、サポートする役割をしながら、それぞれの分科会で活発な意見が出されたようだが、分科会の進行等はどのようにされていたのか？

佐々木委員長：グループ分けは自分たちで行った。柱は会長が分けたが、あとは自分たちで折り合いをつけながら決めた。定例会で分科会の進捗状況を発表する前に5分程度確認の時間をとり、分科会での仲間意識、結束した上での発表だった。

倉持先生：お互いの経験と信頼関係で成り立ち、活発な意見を出し合う様子が伝わってきた。

職員の立場から見ての公運審の進行の仕方、答申をまとめたその先の事業展開、問題意識についてお聞きしたい。

職員富田さん：公運審のみなさんに非常に活発に考えてもらい会長の進行のもと、事務局として全て委ねている状況である。答申を元に、この時代に必要な事業を展開したい。この答申が足がかりになることを確信しており、市民の皆様に還元できるものを目指していきたい。

倉持先生：休憩後、各テーブルで意見交換をしてもらおう。発表への質問等はグループ内で聞いてもらいたい。色々な立場の方からの意見を伺い、ポイントや観点が見えてきたのではないか。今日のテーマは「コロナ禍における公運審の動きと見えてきた新しい公民館のあり方」である。コロナという課題に直面し、公運審をどのように進めていくか、どのような役割があるのか等コロナをきっかけに改めて問い直されている部分がある。同時に、公民館のあり方、新しい、これからの求められる公民館のあり方、果たすべき役割もコロナ禍により問い直されたことが発表を通して見えてきた。

A 班(国立市：江藤委員)

- ・それぞれの公運審がどのような状況で動いているか職員の体制等も含め、活発な情報交換ができた。
- ・オンライン講座については、インターネットを上手く利用しつつ、やはり対面を大事にしたいという話になった。顔を合わせる、それだけで子育て世代のお母さんたちは解決するという例もある。
- ・答申を作っても、それをどう実際に具体化するのかという検証をしていく必要がある。
- ・公運審の体制が弱くなってきている。市民の意見をきく場として利用者懇談会やサポート会議もあるが、それがどこまで続くのかという不安もある。コロナ禍だからこそ、団体が集まってお互いの団体の状況を話し合う機会が実は貴重である。

B 班(国立市：隈井委員)

- ・デジタルとアナログ、対面も重要、みんなが色々な知恵を出し合うことで、色々なやり方で公民館事業ができる。公民館という場所にとどまらず、屋外でも可能である。
- ・パンデミックは又、来る一みんなで知恵を出し合い、平時の DISC コミュニケーションを大切にしていく。

C 班(小平市：勝谷委員)

- ・公運審の引き継ぎ時期が各館ずれているので、混乱が生じる。答申作りに時間がかかった。
- ・定例会のハイブリッド開催は大変であった。公民館はやはり対面が一番であるが、コロナ禍において閉館によって従来、来館していた方々が足を運ばなくなり、認知機能の低下、居場所がなくなったのも現実である。
- ・公民館は今後、利用者をどうやって増やしていくかが課題である。
- ・公民館まつりが少しずつ開催されるようになってきた。利用者の減少という問題を抱えているが、以前のように足を運んでくれるようになってほしい。

D 班(福生市：石井委員)

- ・自分の音楽サークルをリモート音楽祭として発信し、やればできることを実感した。
- ・事業評価についてはほとんどやっていないのではという話が出た。それぞれの市で異なるが、職員だけで企画を立ててやっているところは上手くいかない。小平市や狛江市では、事業の企画段階から市民が入り、試行錯誤しながら事業評価を行い、次年度にフィードバックしていくことができている。福生市もがんばっていきたい。

E 班(福生市：秋間委員)

- ・東大和市の佐々木委員からの報告では分科会の積極的な話し合いがなされているが、他市では、諮問を受け、これからの公民館の在り方について考えると正直、どうしていいかわからない現状もある。答申へのタイトなスケジュール、かける時間、委員の負担が大きいのも事実である。
- ・制約も多かったが、それによって生まれた新しいこともあった。それを活かしながらツールとして、オンラインやデジタルを使いながら、場としての公民館は必要であるということが明らかになった。
- ・今後は、オンラインを使い、公民館だけでなく、市の他の部署と連携しながらハイブリッド型の事業の展開が必要なのではないか。

F班(小平市職員：森さん)

- ・オンラインの公民館側からの配信について、受ける側の能力等不安もある。職員の立場としてハイブリッド形式では人手を割くし、能力が問われる。職員の能力の育成が非常に大切。設備面での配信可能の環境のレベルに差が出てくる。予算面を加味しながら早急に整備していく必要がある。
- ・コロナ禍で、今まで淡々とやってきたことを見直す大きなきっかけとなり、オンラインの波を良い方向に進めていきたい。狛江市ではコロナ前から、事業評価は取り組んできていた。同じことをやりがちな公の仕事を見直すきっかけとなった。

G班(狛江市職員：高橋さん)

- ・コロナ禍において、社会のデジタル化に遅れない、そしてリアルとオンラインの両立が必要と感じる。オンラインへの意識が低いようにも感じる。抵抗と疑心暗鬼もあるが、全体にデジタル化を進行する必要がある。
- ・デジタル化を進めていくように社会が進んでいる。取り込めるような入口の構築。例えとして、スマホ講座は年に2、3回だったが、単発ではなく、継続的に毎月開く位のペースで学び合いの場の継続が大切である。そして、受講者が学び返し、「みんな先生」になっていくような、継続が必要である。多様な世代の交流、若い世代の方が高齢の方にスマホの使い方を教えたり、教えられたりする環境が大事である。又、年齢層や時間帯の多様な事業開催(朝、日中、仕事帰り、夜間の開催等)も考えていく必要がある。

講評：倉持先生

- ・今の発表のなかからも、改めて公民館は、コロナを経て、対面や場としての意義を大事にしたいという意見が出ている。施設としての公民館、物理的な場としての公民館であると同時に、公民館ならではの機能や事業、特徴をどうやって今の時代に生かし、再評価していくかが大事である。
- ・デジタル・オンライン・リモートへの関心が非常に高い。実際、試行錯誤しながらやってきた中で、どうやってうまく取り込んでいくか、職員も利用者も抵抗感をなくし、広げていくかという問題意識をアフターコロナでも継続していくことが課題になっていくだろう。コロナがきっかけで、Wi-Fiやオンライン等の設備をつけることができた公民館が多いのも事実である。市によって差はあるが、公民館事業として、オンラインの講座や配信を行ったところも多かった。そしてその中でも課題がたくさんあることが見えてきた。
- ・評価についても問題提起として事例をあげてもらったことをきっかけに、深められた。
- ・まつりのように、人が集まる事業を今後、どのように展開していくか。
- ・諮問・答申は、公運審の委員にとって大きな問題である。どのようなタイミング、スケジュール、リズム、構成で行っていくのかも課題である。今まで、当たり前のように諮問があり、答申があるということだったが、公運審の体制が弱くなってきている中で、どのように議論をし、実質化・検証化していくかを共有することができた。
- ・答申は提言をまとめるのがゴールのように考えがちであるが、記録することにも意義があり、答申をまとめていくプロセスに於いて色々な団体等にアンケートをとり、声を聴く、多様な意見を集め、共有するそのプロセスが大切。事業の実態や現状を知り、職員と市民や利用者からなる委員が分析し、課題を明らかにする意義が重要である。答申のプロセスの意義は非常に重要だと再確認した。さらにはこれらの答申をもっと発信、共有していくべきではないかと感じた。まとめて提出で終わりではない。答申を検証し、市民や利用者へ発信し、共有し合い、学びあうのも必要ではないか。
- ・公運審委員の役割がコロナを通して、改めて問い直されている。色々な意見を答申に反映し、共有していける

よう、進め方、関係性の構築も含め、負担感のある中で次の世代にどのようにつなげていくかを考えていくことが大事である。職員の異動や委員の交代がある中で、ほどよい緊張と信頼関係を職員と委員の間で作っていくか、考えていかななくてはならない。対話と合意形成を試みる機会をどのようにうまく、公運審の会議の中、公運審と利用者の中で作っていくかである。

- ・色々な事例発表やシンポジウム等を通して意見交換がなされたが、今日は結論を出す会でない。それぞれが問題意識をもち、各市の公運審で共有し、活動に活かして行ってほしい。また、今回の都公連の企画・運営等も非常に練られており大きな財産となった。

質問・感想等

東大和市：新井委員

- ・国分寺市のアンケートの結果の後、すぐに答申案の3つの骨格の運びになっている。そのようなプロセスはどのように進められたか？例えば、東大和市の佐々木委員からの説明のように分科会を作り、ステップを踏んでいったのか、そこを是非聞きたい。

国分寺市：戸澤委員

- ・任期が半分を過ぎ、練る時間が無いのが正直なところだった。公運審を2つに分け、一つは集客事業の開催、もう一つは意見の活発になったオンラインについて話し合った。当時の委員長・副委員長の采配の元、これでいい、それでいいねと言う落とし所に導いてもらったが、抽象的なプロセスとなったのも否めない。

西東京市：西原委員

- ・みなさんや、先生からのお話を聞き大変勉強になった。問題点を探り出し、前向きに色々考えていきたい。コロナになった時を思い出すと、一寸先は闇で先がわからない不安感があった。当時、公民館が閉鎖され、かなりの緊急時であった。今後、国立市でも答申として、「緊急時に対応できる公民館運営審議会の体制整備」ということも視野に入れているが、私たちはどのように動いたら良いか、どのような形で公民館と市民が関わっていったら良いかを、今一度、考えてみたいと強く思うことができた研修会だった。

国分寺市：本多公民館長

- ・令和3年4月はコロナ禍、真っ最中だった時に、本多公民館に異動となったため、日々、コロナ対応の対策会議に出席せざるをえなかった。今、ようやく先が見えてきた。公民館は100%対面の世界とっていたが、いきなりオンラインをやらないと、どうにもならない状態になった。この会場でも小学校 PTA 共催で教育講座をハイブリッドで初めて経験し、つながる・つながらないという初歩的なところで苦勞をし、画面越しの講師の先生、PTAの方々に助けてもらった。徐々に、当たり前のようにみんなができるようになっていった。もちろん、オンラインだけではなく会って話をすることがとても大切であると再確認することができた。
- ・国分寺市でも教育ビジョンがあり、それぞれの課でテーマをもち、事業評価をし、振り返り等も数値化している。その中でもやはり、基本は対面であると実感した。各市の特徴もあるが、共通な想いもあり、今後も情報共有していきたい。

閉会の挨拶：田中委員部会長

- ・シンポジウム・グループワークを倉持先生が全てまとめてくださり、また、各グループ内では活発な話し合い行われ、これこそ公運審の話し合いの場であると痛感した。コロナ禍で行政指導期間の中、公民館は不要不急のような風潮もあり、各市とも、どのように活動をして良いのか模索してきた。その一つとして、オンライン化を考えた。オンライン化と言っても予算の問題、機能性の問題等たくさん課題がある。だが、オンライン化により、見えてきたものがある。若い世代、未利用者への参加が期待できるという声があがってきているのだ。学校・大学・社会福祉施設・ボランティア団体等、多元的な長期関係を築ききっかけとなっているのではないだろうか？従来の対面式至上主義+オンライン化による新しい次の世代の公民館の姿ができてあがっていくのだと思う。
- ・人と人が集い、交流するという本来の姿と、オンラインでつながりを保つ機能は今後の公民館の活動に、必要不可欠なものと思う。いかなる場合も市民のみなさんが、必要と思ってくれるような公民館であるように、我々公運審としてもさらなる活動をしていきたいと思う。
- ・「3つのつ」→「つどう・つなぐ・つくる」いつまでも継続されるべきものである。公民館は確かな情報の発信力も問われている。
- ・コロナ禍のような不安な世の中では、「公民館は市民の心のワクチンだ！」と言える。お疲れ様でした。

以上

令和4年度 東京都公民館連絡協議会委員部会研修会
 コロナ禍における公運審の動きと 見えてきた新しい公民館のあり方

実施日：2022年10月1日

以下、該当する項目に○印をつけてください。

西東京市	福生市	狛江市	東大和市	昭島市	町田市	小金井市	小平市	日野市	国立市
2	4	4	5	1	1	3	6	0	6
国分寺市	それ以外			合計					
4				36					

1 どのような立場で参加していますか

公運審	職員	市民	その他	
25	10	0	1	

2 委員部会研修会への参加回数は？

初めて	2回	3回以上
16	6	13

3 この研修をとおして新しい公民館や公運審のあり方について得ることができましたか。

満足		やや満足		やや不満		不満		平均点
4	24	3	9	2	1	1		3.68

ご意見・感想（何を学びましたか）

他市の公運審の様子が知れた。いろいろ違って羨ましかったり、羨ましがられたり。

他市の考え方を学びました。公民館の場としての重要性を感じました。

初めての参加です。他市の公運審の方、職員の方と交流ができたことは良い経験になりました。

各市の状況や考えをお聞きすることができ、様々な視点から公民館について考えることができました。ありがとうございました。

各市の公運審委員の方々がそれぞれに試行錯誤を重ねていることがわかりました。公運審の在り方についても改めて考える機会となりました。

「新しい公民館」「公運審のあり方」については、踏み込んだ発表・議論ができればよかったかと思いました。

事業評価に関すること。コロナ禍での公民館のあり方を考えることで新しい事業展開の可能性

答申の内容が濃い。委員の負担が各市で違う。

他市の動きを知ることでアイデアと勇気をいただくことができた。

各市のコロナ禍で模索した活動の様子が伝わってきました。

話がよく見えない報告があったりして、初心者には理解しにくかった。

なるべく新しい公民館をつくれるよう、色々と提案していきたい。

国分寺市の公民館事業・運営も悪くないぞ、公運審もなかなかやるじゃないかと思った。近隣自治体の公民館の様子を知ってとても参考になった。

答申づくりのプロセスや意義について倉持先生がまとめてくださったのがよかった。また、答申の活用の仕方も大事だと思う。

4 開催の日程・時間はいかがでしたか。

満足		やや満足		やや不満		不満		平均点
4	20	3	13	2	1	1		3.56

ご意見・感想

それぞれの時間が短いのでは。

日程は満足。時間は足りなくて不満。もう少しグループワークの時間が欲しかった。

月初は少し忙しいです。

タイムスケジュールをもう少しゆとりある方向であってほしい。

各市の公民館の立ち位置。

もう少し時間が短い方がよい。

きっかけとして他市の状況を知ることができたことはよかったです。深める機会があってもよいと思いました。

昼食時間が十分に取れなかった。

基調、リレー、シンポ、グループワーク、発表の構成、グッド！

自市の公運審の任期を考慮せず10月1日で賛成してしまった。時間は午後4時30分ぐらいまででもよいかもしれません。

4時終了の時間厳守でお願いしたかった。

各パートが短すぎたようだ。

できれば平日がよい。

5 当日の進行などスタッフの対応はいかがでしたか。

満足		やや満足		やや不満		不満		平均点
4	26	3	7	2	1	1		3.74

ご意見・感想

よく頑張りました。お疲れ様です。

ギリギリで着いた私に、スムーズに席に行けるように対応してくださって助かりました。受付で着て、会場でもすぐに誘導してくださって、そのお二人のおかげですぐに席に行けました。ありがとうございました。

スムーズで良いです。

グループワークではお互い全員の考えたが聞けて参考になった。

研修としてとても丁寧にまとめられた内容だったと思います。

笑顔で対応されて気持ちよかったです。

準備から細かい気配りに頭が下がります。時間内にといいことでしたが、もう少しゆとりがあっても良いかと思いました。お疲れ様でした。

とてもよいです。

当日の進行、スタッフの対応は良かったと思います。

6 研修で学んだことを今後どのように活かしていきたいですか。

共有できる内容を公運審に持ち帰り、市にあった形で実行できると良い。

公運審定例会や利用者交流会に持っていきます。

まだまだ右も左もわからない状態な自分が恥なので、他市のことを知って自市のことに活かしたい。

他市の方のご意見を聞き大変参考になりました。今後、お聞きしたことを活かせるように考えていきたいと思えます。
ハイブリッドをどのように取り組むか。
自市の公運審定例会で話し合いたいと思えます。
毎月の審議会に活かして、利用者の方々へ反映できるようにしたい。
単に答申を出すというのではなく、そのプロセスをどう活かしていくのかまた答申自体をどう活かすのかといった視点で今後の公運審の活動に取り組んでいきたいと思えます。
幅広い世代を対象とする事業。若い世代の取り込み方
事業評価のやり方
公運審の体制の弱いところと強いところの差を実感し、どのように市民の声を集めて活かしていくかについて課題を共有できた。市民と職員でどのように合意形成をしていくか考えさせられた。
公運審での発言が活発になるよう、市民の意見が反映される心掛けたい。
オンラインというツールに行きがちなところ、①通信講座②出張公民館③青空公民館④2週間公民館まつり⑤リスクコミュニケーションの大切さ たくさんの学びがあり驚いています。
狛江市のボランティアを受け入れる柔軟性を当市の公民館事業に必要なと思った。
公運審の会議で今回の研修の報告をし、方向性を委員間で共有して市民との架け橋になっていくように共通理解をしたい。
市民との協働は必須。デジタル時代の不安を取り除く講座とデジタル時代を活用。安心して学んでいく交流の社会学習の拠点。
狛江市の事業評価がどのように参考にできるか、メリット・デメリットを十分に学んで検討していきたいと思った。
答申の活用の仕方について考えたい。

7 研修の講座で感じたこと、疑問に思ったことなど、ご自由にご記入ください。

内容の濃い研修でした。他市のコロナ禍での活動状況を知り得た。
これから考えます。コレといって結論は出ない。
活発に意見や感想が出されてよい研修会だったと思えます。
グループワークとシンポジウムがよかったと思えます。
公運審の体制弱体化が話題に上がっていました。どう次の世代に公運審をつなげていくのか、その在り方について考える機会があると良いのではと思えました。
各市の公民館の立ち位置、講座の持ち方にかなり異なる状況があり、同じ言葉でも指し示す意味が異なることを感じました。対話を重ねるなかでそうした差異を乗り越える中で、よりよい都公連として目指すべき公各市で様々な違いや共通項目があることがよく分かった。
デジタルに関する技術や知識を職員側も利用者も共に広める必要があるという意見があり、設備の充実をはじめ、新たな手法での事業展開をしていく取組みをしたい。
「コロナ禍における～」オンライン関係はもっともなことです。対面が必要と感じた理由、私たちが大切にしてきたこともふまえ、コロナ禍で見えてきた課題を人権や命とからめて学んでいく事業をさらに充実させることが大事だと思えました。
各市の取り組み方、特色、職員と公運審の在り方がみえて興味深かった。国分寺市のアンケートは大変参考になった。
グループワークではとても意見交換しやすい雰囲気を作ってくださいととても参加しやすかったです。ありがとうございました。
国分寺はなぜモバイルルータの導入となったのか。光回線+W i - F i ルータという選択肢はなかったのか。
オンライン・対面と両輪で、これから公民館の講座を企画運営していくことが大切であると再認識しました。つどう・まなぶ・つなぐ公民館の本来の姿を改めて考えていくことができました。
やはりデジタルの推進が重要であると感じた。
グループワークで何をやるのか意図が分からなかった。答申を出すための措置として公民館事業を振り返って検証していく作業が大事であることを学んだ。